



## 私のふるさと

吉川 利文

花摘む野辺に 日は落ちて  
みんなて肩を 組みながら  
唄を歌った 帰り道…

ご存じ、霧島昇の「誰か故郷を想わざる」である。私のカラオケでの持ち歌のひとつである。この歌には限りない郷愁を覚えるのに、そんな私に実は故郷がない。私の“浮き草人生”が原因である。

私は昭和17年、大阪の街なかに生まれた。その前年太平洋戦争が始まり、戦況はどんどん悪化していた。学校は学童疎開が始まり、住宅は家屋疎開を迫られた。父の弟が現北朝鮮の平壤(ピョンヤン)におり、「来ないか」との誘いもあって、死ぬなら家族一緒に、と同19年、両親は子供4人を連れて平壤へ移住した。いま75歳の弟は平壤で生まれた。同20年終戦。平壤にソ連兵がなだれ込み、住宅の接收、略奪、婦女暴行など乱暴ろうぜきのし放題。朝鮮人の眼も日本人には冷たい。父は現地応召で不在。身の危険を感じた母は高校生の長女を頭にまだ1歳にもならない弟まで5人の子供を連れて平壤を脱出。ほとんど徒歩で38度線を越えソウルまでたどり着いた。

引き揚げ船で博多へ、父が復員していた広島、父の勤務先の大阪、社宅の神戸へと転々。おろん私は母とずっと一緒だ。

私の浮き草生活はさらに続く。小学校4年生の時、父の定年退職に伴い神戸から大阪へ。大学は京都、就職したのは名古屋の会社、富山県高岡市へ転勤、会社を変わり和歌山→京都→大阪→岸和田→大阪→西宮→京都→大阪→奈良→大阪→東京→大阪と目まぐるしく転勤。結婚してからも実に11回転居している。おかげで、関西の五私鉄、JR沿線にはすべて住んだ。

故郷などできるわけがない。ただ、不思議な体験がある。一昨年秋、ある市民運動の活動と

して韓国ソウル市で1週間、普通の市民のお宅にホームステイしたことがある。いろんな企画や見学、小旅行で親切にもてなしてもらい楽しい日々を送った。見るもの、体験するもの、ほとんど初めてのことだった。だが、私には「ほう、珍しいな」という感想よりも、なぜか懐かしさが強まるばかりだった。

平壤から引き揚げる時、母は3歳の私を背負い、両手に長男と次男の手を引き、丸刈りと詰め襟で男装した長女に乳飲み子の弟を背負わせ、地理もわからない他国の山道を、昼間はソ連兵や朝鮮人の略奪や暴行を避けるため、夜間、離散しないよう互いの名前を大声で呼び合いながらさまよったという。母は戦後まとめた手記に「悪夢」というタイトルを付けたほどの苦難だった。だが、私はよく覚えていない。

それなのに、ソウルにホームステイしているうちに、街のたたずまい、行きかう人々の表情や雰囲気などが、なんだかいつかどこかで見たことがあるような「既視感(デジャ・ビュ)」に襲われたのである。潜在意識に眠っていた幼児期の体験が呼び起こされ、「疑似故郷」として感じられたのかもしれない。それほど、故郷のない私の半生はみじめで寂しかった。

でも、最近、発想の転換を始めた。それは、浄土宗の宗祖法然上人の臨終のころの逸話がヒントである。高弟たちが、病床の上人の最悪の事態に備えて、ご本人に遺跡(死後に祀る寺院、墓所など)をどこにすべきかを尋ねたことがある。上人は「私の遺跡はひとつではない。念仏の音がするところはみな私の遺跡だ」と答えた、という。上人は岡山県の生まれだが、修業や布教で各地を転々としている。上人と私とでは断然格が違うが、転居の境遇は似ていなくもない。そこで、上人ばりに「私の故郷は、私が住んだところすべてだ」と答えたいものだ…。

それにしても、ほんとうのふるさとがほしい。  
花摘む野辺に 日は落ちて 誰(たれ)か故郷を 想わざる——  
なのである。